審査の結果の要旨

氏名　武石典史

本論文は、明治期の東京に叢生した私立中学校及びその入学者の分析を通して、上京という地理的移動の様態がどのように変化していったのかを検討しつつ、近代化の中で私立中学校が果たした社会的機能を明らかにしている。

第Ⅰ部では、東京の私立中学校が有していた、「受験のための知」の提供という役割が検討されている。まず、近代化過程における中等教育カリキュラムの比較を通して、旧来の伝統的な知の体系と断絶したカリキュラムを採用していったことが、日本の特徴として描き出されている。そこには、伝統知／近代知の断絶・格差が存在した。そして、地方から集まる青少年に対してそうした知のギャップを埋め、高等教育機関への進学を準備させる場として私立中学校が登場してきた過程が考察されている。

第Ⅱ部では、東京の私立中学校が有していた、全国の中学校の半途退学者の受け皿という役割とその推移とが検討されている。明治期の中学校の卒業率は低く、おびただしい半途退学者の一部は上京して、東京の私立中学校に「敗者復活戦の場」を求めていた。本論文では、大量な入学者の経歴データを分析することで、いつごろ、どのように、半途退学者の受け皿機能がなくなっていったのかが明らかにされている。

第Ⅲ部では、一方では、私立中学校入学者の属性の分析を通して、他方では、大正期～昭和期の東京府における中学校入学難問題の検討を通して、東京の私立中学校が、地方の旧中間層出身者への教育機会を提供する役割を喪失し、地元東京の新中間層の子弟の受け皿になっていった過程が明らかにされている。

従来の研究では公立学校を中心にした視点が強く、近代化のある段階までの人材の選抜や育成に関して、東京の私立中学校が果たしてきた役割は重要であったにもかかわらず、十分に検討されてきてはいなかった。本論文はその空白を埋めるとともに、知のギャップや地理的移動など、これまでの研究では弱かった視点から近代日本の中等教育の実証分析を行った点で、きわめて斬新なものといえる。また、非常に貴重な実証的知見を含んだ大量の学籍簿データの量的な分析や、自伝や新聞、雑誌などを広く渉猟した丹念な質的考察などによって、当時の上京者の就学や生活の様子を鮮やかに描き出すことに成功している。分析の軸になるべき理論的な枠組みがやや弱い点や、無試験入学や補助金のような諸制度に関する政治過程的な視点からの考察が乏しい点など、いくつか限界はある。しかしながら、中等教育の社会史的考察としてすぐれているとともに、近代日本における教育機会と社会変動の関連について、新しい知見を提供する研究である。博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文といえる。